

絶滅危惧種・ヒト

— その復活策 —

藤 永 太一郎*

2万年前、氷河期が終了直前の新ドリラス期には厳しい寒冷化がおこってヒトは個体数が激減し、今日のコウノトリのように絶滅危惧種になっていた。ところが絶滅したのは繁栄していたマンモス象の方で、ヒトは細々と生き残ったのである。

このヒトを復活させ今日の繁栄に導いたのはシャカ、キリスト、モハメットといった佛や神である。この2千年前の首長達の指導よろしきを得てヒトの個体数が激増した。そして今日丁度反対のことが起っている。長く続いた間氷期が終りに近付いて大気の温暖化が特に進んでいる。ヒトは高温血動物という事も幸いして極端な定向進化 orthogenesis を行ない丁度絶滅直前のマンモス同様の過密状態となった。しかし過密からの絶滅についてはその後経験がないため自らの危機を察知できないで、例えばコウノトリの保護に努めている。主客転倒している、それどころではないのである。

よって本講では、科学的視野にたつて、世の指導者 decision maker 達に、その危惧を訴え復活の方策を述べることにしたい。先ず、地球という容れ物は大きさが決っていて間もなくヒトで一杯になるという事実である。溢れてからでは間にあわない。筆者がかねて指摘してきたように、120億人が限度であつて、現態勢の俣だと2060年にその値に到達する。奇しくも先日、かのニュートンが1700年初頭に既に「2060年以降に世界の終末が来る」との文書をエルサレム

のヘブライ図書館に残していたと報道（2007年6月22日京都新聞）され、あまりの一致に驚嘆すると共に、本文起草を勇気づけられた事である。

ニュートンの生きたルネッサンスの時代にヒトは知性を手段とする進化に目覚めたのであり、それが引続く産業革命で実効を挙げ、以後人口や最高交通速度などの文化指数が規則正しく指数函数的に急増するのである。人口は50年毎に倍増する。

紀元 X 年の値 x は、紀元 A 年の値 a から次式で求められる。

$$x = 2^{\frac{X-A}{B}} \cdot a$$

茲に B は値が倍になるに要する時間、倍増期 double life である。

今やヒトはその存在自体が環境破壊的である。このような終末的自己矛盾に行きつかないためには速やかな現代文化の止揚、そして自由市場経済の背景となっている誤った実用主義を排して、知性によって制御される主知主義の世界実現のために思いきった精神革命に入らなければならない。

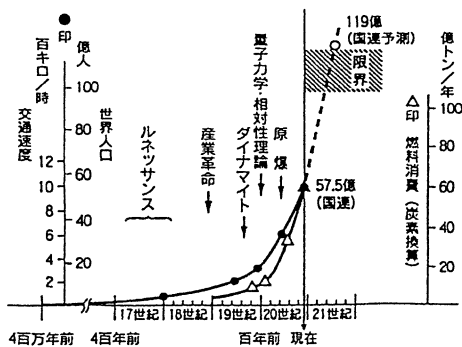
具体的な取組みとして先ず海洋文明の構築を提起する。地球表面の7割をこえる面積が海洋でありながら近年ヒトは海に全く関心を示さなくなっている。(cf コロンブス時代)。既にエネルギー、食糧、環境で急速に行きづまってきているにも拘らず海洋が忘れられている。表層

*京都大学名誉教授、(勸)海洋化学研究所理事

第207回京都化学者クラブ例会（平成19年9月1日）講演

は貧栄養であるが深層海水（100～500m 以深）は例外なく富栄養であるから、この海水を海流のエネルギーを使って自力湧昇させれば海産動植物の大増産が可能となる。またそれに伴って大気中の二酸化炭素が吸収され温暖化防止にも役立つのである。この海洋沙漠 ocean desert の緑化計画は技術的に可能でありながら公海上の外交問題と経済利害が障壁となって本格的に取り組まれていない。

反面、大気と宇宙の開発研究は大規模に行われ、巨大航空機、ミサイルが飛び交い、科学技術と資本が惜みなく投入されている。日本人の海外渡航客年間2,000万人（うち観光客1,600万人）既に月に移住することすら可能になりそうであるが、人類の命運に役立つとは殆ど考えられない。旧約聖書に書かれた「驕れるヒトが天に昇ろうとてバベルの塔を築こうとした」話をその妄想いおこさせる。われわれは海から出てやっと陸に棲めるようになった。鳥や蝶のように長年かけて手脚を翼にかえる事ができるよう



【図】 紀元 1600 年～2100 年の間の、世界人口、最高交通速度、燃料消費の推移。〔著者原図〕

になってから空に投資するのでよい。「空ではなく改めて海を耕して棲むことにしよう」。

次にエネルギーの枯渇が間近であり殊に炭素燃料の消耗が著しい。将来とも大量に安定供給できるのは核エネルギーである。軍事利用が先行する為遅れているが Th の利用も含めて小型の民間用原子炉の開発を急ぐべきであろう。現在経済的に少し及ばないが U、Th とともに海水中から採取できるし、地殻鉱物としても潤沢に存在する。早急に技術開拓することが望ましい。関連して一言、その代りに核兵器は現有5 大国とも即刻廃止し、国際公開研究の地盤を形成することである。

真近に迫っている絶滅を避け、永続する生物種としてのヒト社会を創る復活策の根本は、機能しなくなったキャピタリズム経済社会を清算することである。世界人口15億、年間燃料消費炭素換算10億トン、最高交通速度200km/時というのが1900年時点のヒトである。その時量子力学、相対性理論が現われ、ヒトが知的活動を展開するに必要十分な条件が備わった社会であった。その頃は職業の貴賤について「士農工商」といった時代でもあった。今ではそれが商工農士の時代となっている。明日金儲けのできるヒトを首長にする慣わしとなり、多くの場合、日米とも、世襲になっている。民主主義的方法論（多数決選挙）を踏襲しているがキャピタリズム同様墮落して機能しなくなったのである。

科学者が科学者を首長（神佛）に選ぶ社会を創りヒトを復活させねばならない。絶滅が目前なのである。